

1. 理事長あいさつ

〈日本放射線看護学会 草間 朋子理事長のご挨拶〉

医療の領域では放射線診療が日常的に実施されております。さらに、福島原子力発電所の事故を契機に、「被ばく医療」の充実の必要性が再度、認識されております。

しかし、一方では、患者さんを含めた一般の人々はもちろんのこと、看護職自身の放射線、放射線被ばく、放射線の健康影響等に対する不安は、一向に変わっていないように思われます。

このような中で、日本放射線看護学会および一人ひとりの学会員が当面取り組む必要のある課題は以下の事項ではないでしょうか。

- ① 放射線・原子力利用における看護職の役割を明確にする。
- ② 看護の専門職としての役割を果たすための必要なスキルを明確にし、これを一人ひとりの看護職が理解する。
- ③ 看護職に必要とされるスキルを習得するための具体的な方策を確立する。
- ④ より高度な専門性を備えた「放射線看護」の専門看護師（CNS）の役割を明確にし、育成に努める。
- ⑤ 放射線看護は、本会員のみではなく、全ての看護職が避けて通れない看護の1つの領域であることを、看護界に広報していく。

9月12日、13日に鹿児島県指宿 メディポリス国際陽子線治療センターで開催された第4回日本放射線看護学会学術集会（中馬 育子会長）では、「放射線看護」について有意義な議論が交わされました。

2. 理事会からのお知らせ

平成27年度（平成27年4月1日）から3年間、新たな体制となりました。

○新理事・監事の紹介

○学会員数

平成27年9月1日現在、会員数は461名、賛助会員は5社です。

○総会報告

平成27年9月13日（土）13時～14時まで、指宿ベイテラスにて開催されました。

総会での主な審議事項については、下記をご参照ください。

〈平成27年度日本放射線看護学会総会報告〉

日本放射線看護学会学術集会1日目の平成27年9月5日（金）13：30～14：30に、指宿ベイテラスHOTEL&SPA バンケットホールにおいて、平成27年度総会を開催、無事に終了しました。

会員出席者は最終的に34名、委任状が153名、出席役員13名で、正会員461名の委任状を含む5分の1以上の出席で総会は成立しました。

放射線看護のエビデンスの発揮・発信に本学会が重要な役割を担っていると草間理事長より挨拶が述べられたあと、中馬学術集会会長を議長として議事が進行されました。

予定していた審議事項は平成26年度事業報告、平成26年度決算報告、平成27年度事業案、平成27年度予算案であり、すべて異議なく承認されました。また、第6回日本放射線看護学会学術集会（平成29年度開催）は、名古屋大学の太田勝正理事を学術集会会長として開催されることが報告されました。

最後に、第5回日本放射線看護学会学術集会会長の草間朋子理事長より、平成28年度に開催する学術集会の案内が述べられ、参加と演題登録のお願いがされました。

3. 各委員会の紹介

○編集委員会

編集委員会は、学会誌の編集と発刊を行っています。主に学会員皆様の論文投稿から、論文掲載までの期間に関わりますが、その他の期間は、投稿手引きの見直しやWeb査読のテストランなどを毎巻行い、編集システム的环境を整えています。

平成27年4月から新体制となりましたので、委員メンバーとその活動について紹介いたします。

【委員紹介】

委員長：八代利香（鹿児島大学医学部保健学科総合基礎看護学講座）

副委員長：吉田浩二（福島県立医科大学災害医療総合学習センター）

委員：新川哲子（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻）

北宮千秋（弘前大学大学院保健学研究科健康支援科学領域健康増進科学分野）

相羽利昭（東京純心大学看護学部看護学科）

今村圭子（鹿児島大学医学部保健学科総合基礎看護学講座）

【活動内容】

平成24年度の学会発足から平成26年度までに、3冊（第1巻～第3巻）の学会誌を発刊してきました。（毎年度3月発刊）第2巻学会誌より紙面からオンライン公開に切り替えて公開しています。今年度も第4巻学会誌の発刊に向けて取り組んでおり、さらなる海外発信も視野に入れ、海外からの英文投稿環境を整備中です。

【第4巻学会誌について】

★投稿資格：著者、共著者はすべて学会員であること

★投稿期間：平成27年8月1日から9月28日12:00

★投稿手順：日本放射線看護学会HPに投稿手引き、投稿用ファイル等を掲載

★掲載予定：平成28年3月予定

皆様の研究成果や情報を、一早く発信し、多くの方に届くように努めてまいります。どうぞよろしくお願い致します。

○学術推進委員会

学術推進委員会は日本放射線看護学会の学術推進を目的とし、関連学会及び団体との連携強化に関する活動や学会および学術集会の活性化・学術推進活動を行っております。

平成27年4月から新体制となりましたので、委員メンバーとその活動について紹介いたします。

【委員紹介】

委員長：西沢義子（弘前大学大学院保健学研究科）

委員：野戸結花（弘前大学大学院保健学研究科）

青木和恵（静岡県立静岡がんセンター）

太田勝正（名古屋大学大学院医学系研究科）

作田裕美（大阪市立大学大学院看護学研究科）

大森純子（東北大学大学院医学系研究科）

【活動内容】

平成27年度5月に、第15回国際放射線研究会議（ICRR2015 Kyoto）に合わせ、放射線看護シンポジウム（ICRR 2015弘前大学サテライトミーティング放射線看護シンポジウム）を開催しました。また、8月には日本看護研究学会第41回学術集会において、特別交流集会を開催しました。上記の活動の詳細はニュースレター第1号「活動報告」をご参照ください。

今後の企画として下記のセミナーを開催致します。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

日時：平成27年11月7日（土）13：00～16：20

場所：東京工業大学キャンパスイノベーションセンター国際会議室（東京都港区芝浦3-3-6）

テーマ：放射線診療における看護に必要な最新の知見

＜教育講演1＞

テーマ IVR診療～ボクと鳴海病院と、毎日、INE看護師～

講師 一般財団法人医療と育成のための研究所清明会理事長 淀野 啓 先生

＜教育講演2＞

テーマ 最新の核医学検査と放射線看護

講師 横浜市立大学附属市民総合医療センター病院長 井上 登美夫先生

対象：放射線看護に興味・関心のある医療職者

募集：80名程度

ウェブページによる事前申込み <http://rem-hirosaki.jp/index.html>

締切 10月19日（月）



○国際交流委員会

国際交流委員会は平成27年度に新設されました。日本は原子力災害を経験し、現在は長い復旧の途上です。原子力・放射線災害に対する看護職の関わりの知は世界的にも十分に集積されていません。日本はまた、世界一多くのCT装置をもち、国民の医療被ばくは世界で最も高いといわれており、医療被ばくの正当化・最適化の面でも放射線看護の役割が重要です。そのようなわが国における放射線看護を世界に発信することが大変重要です。

以下、委員会の主な任務と活動状況を紹介いたします。

【任務】

- ・国際的な活動に資する情報提供、
- ・国外への情報の支援
- ・海外の関連学会・機関との連携・交流
- ・その他、国際的に活動・交流に関わること

【委員】

委員長：小西恵美子（鹿児島大学医学部客員研究員）

委員：福島芳子（放射線医学総合研究所）

【活動】

★これまで：

第3回国連防災世界会議JANAパブリック・フォーラムにおいて、以下のプレゼンテーションを行いました。

タイトル：日本放射線看護学会と福島原子力災害

(The Radiological Nursing Society and the Fukushima nuclear disaster)

日時と場所：平成26年3月14日（土）、仙台市AER情報産業プラザ

発表者：小西恵美子、吉田浩二、福島芳子

★これから：

- ・本学会の英文HPを広報委員会と協議しながら充実させていく。
- ・会員が発表した英文論文や国際学会・会議でのプレゼンテーションの記録を英文HPに公開する。
- ・海外関連学会と本学会とのリンクについて検討し提案する。たとえば、The Association for Radiologic & Imaging Nursing（ARIN）など。

国際交流委員会は発足したばかりです。委員会の活動について皆様のアイデアをお待ちしております。また、ご協力をどうぞよろしくお願い致します。

○広報・渉外委員会

広報・渉外委員会は、会員ならびに広く社会に対して本学会の活動について周知することを目的に活動いたします。具体的な活動としては、本学会の広報のための広報誌（ニュースレター）の編集および発行、ホームページの管理等を行います。また、放射線看護に関連する分野で活動する方々との交流をすすめていきます。

【委員】

委員長：太田勝正（名古屋大学）

委員：桜井礼子（東京医療保健大学）

【主な活動】

1. 広報誌（ニュースレター）の発刊（年3回を予定）

広報誌は、会員の「放射線看護」の理解と実践力向上に資するためのもので、会員に対する理解及び協力を求めるため周知する必要のある事項、会員の看護実践能力向上に関わる事項、理事会および運営上、理事長が必要と認める事項等です。

2. 学会ホームページの管理・更新

理事会、各委員会、会員の皆様らの依頼により、ページの作成・更新を行い、放射線看護に関する最新の情報を提供していきます。また、国際交流委員会と協力して、英語版のホームページの充実もはかっています。

3. 学会活動の情報発信

学会で行っている学術活動や放射線看護に関連するガイドライン等様々な情報を発信していきます。

4. 正会員および賛助会員の募集

日本放射線看護学会のリーフレットを作成し関連機関への配布を行ったり、ホームページの内容を充実して学会の活動に対する関心を高め、会員を増やす活動を行っています。

5. 関連機関に向けた渉外活動

放射線診療、放射線防護等に関連する学会等との連携を図り、他領域からの情報収集や交流などの渉外活動を行っています。

4. 学術集会について

○第4回学術集会の報告

学術集会会長 中馬育子（メディポリス国際陽子線治療センター）



「最先端の放射線診療の現場から放射線看護の未来を拓く」

本年9月12-13日に、鹿児島県指宿市のメディポリス国際陽子線治療センターと指宿ベイテラスHotel&Spaにて、第4回日本放射線看護学会学術集会を開催させて頂きました。台風や大雨が心配される中、澄みわたる秋晴れに恵まれ遠路指宿まで全国から合計227名もの皆様にご参加いただきましたことを、心より感謝いたします。

今回は、放射線診療現場から学術的思考を拓くという思いで進めてまいりました。会員の皆様からは60題もの一般演題の申込みをいただき、これからの放射線看護学発展に向けた熱い息吹を感じました。初日は満席となるセッションもあり、非常に学び多いとの声をいただきました。2日目の陽子線治療の紹介・施設見学には、当初予想を上回る方々にご参加いただき、皆様が高い関心をお寄せ下さっていることを大変嬉しく思うとともに、治療現場に籍を置く者としてさらなる研鑽をと思いを新たにしております。今回学術集会全体にわたる学びが放射線看護の発展に繋がることを切に願っております。次年度は、東京での開催となります。さらなる新しい知見や熱い討議に出会えそうで今から楽しみです。



医療安全シンポジウム

放射線看護の基礎に医療安全の意識付けを学びました



ポスター会場

多彩な演題発表に意義深い討議ありがとうございました



乳がん治療デモ

近未来治療に興味津々色々なご意見もいただきました

○第5回学術集会のご案内

〈第5回日本放射線看護学会学術集会のご案内〉

医療現場では、放射線を用いた診療は日常的に行われ、放射線被ばくに泰然たる関心が高まっております。また、2011年の原子力発電所の事故以降、地域の人々の放射線被ばくに対する不安が高まっております。患者さんや住民の方々のもっとも身近な存在である看護職は、放射線を怖がるのではなく、正しい知識をもって、対応していく必要があります。

このために、学術集会では、教育講演や体験型のワークショップなどを通して、放射線の存在を実感し、エビデンスに基づく知識に関心を持っていただければと思っております。

皆様のご参加をお待ちしております。

第5回日本放射線看護学会学術集会の概要

【学術集会のテーマ】

メインテーマ：放射線と向きあう看護

“Nursing Science faced to Radiation”

【会期】

平成28年9月3日（土）、4日（日）

【会長】

草間朋子（日本放射線看護学会理事長東京医療保健大学副学長）

【会場】

東京医療保健大学国立病院機構キャンパス

住所：〒152-8558東京都目黒区東が丘2-5-1

【主なプログラム】

- ・会長講演
- ・シンポジウム：「日本放射線技術学会」「日本保健物理学会」と共同企画
- ・特別講演
- ・一般演題口演/示説
- ・ワークショップ/ランチョンセミナー
- ・企業展示/書籍販売
- ・総会

5. 活動報告

○ICRR 2015 弘前大学サテライトミーティング放射線看護シンポジウム報告（平成27年5月開催）

第15回国際放射線研究会議（ICRR2015 Kyoto, Japan - 15th International Congress of Radiation Research、会期：平成27年5月25日～29日）が国立京都国際会館で開催された。この会議に合わせ、弘前大学ではSatellite Symposiaとして日本放射線看護学会と共催で放射線看護シンポジウム（平成27年5月23日（土）10：00～16：00）を開催し、60有余名の参加者を迎え、成功裏に閉会した。

シンポジウムのテーマは「A Review of Japan's Radiation Nursing Framework」とし、日本における放射線看護の枠組みを討論する機会とした。

はじめに、アメリカで放射線看護に従事する看護師Mie Fowler氏（DeKalb Medical Center, GA, USA）により、「アメリカにおける放射線看護及び放射線看護教育の現状と日本への提言」と題した特別講演が行われた。放射線腫瘍学の分野で活躍するCNSやNPの活動や、放射線がん看護の認証試験等について紹介した。また、高度実践看護師APRNの質を担保するためには、ライセンス（Licensure）、認証・認定（Accreditation）、資格認定（Credentialing）、教育（Education）、すなわちLACEモデルが重要と言われている点に触れ、日本の放射線看護においても教育体制の整備や継続教育を強化することが今後の発展に繋がることが提案された。参加者からは、学部学生に対する放射線看護教育の現状や継続教育、online教育に対するサポート体制など様々な質問が挙がり、アメリカの看護に対する関心の高さが覗えた。アメリカの学部教育では、放射線に関する内容のみで看護について触れる機会がなく、看護師として放射線科に勤務後、自らが研修会等でスキルアップをはかって看護を行っているため、アメリカの学部教育においても放射線看護を教授する機会を設ける必要性が示唆された。

次に、草間朋子氏（日本放射線看護学会理事長、東京医療保健大学副学長）により、基調講演「放射線看護教育—過去・現在・未来—」が行われた。多くの人々が放射線の健康影響・リスク、放射線診療に伴う医療被ばくに対して不安を抱いている現状を挙げ、患者や国民が安心して放射線利用・放射線診療を受け入れることができる状況を整えることが看護職の役割であり、全ての看護師が「患者と一緒にあって放射線を怖がることのない看護師」となるべく、看護基礎教育の中に放射線看護のカリキュラムを取り入れることが不可欠であると述べた。一方で、保健師教育においては放射線リスクに関する情報を分かりやすく伝えるスキルの習得の必要性や、放射線看護の教育を担当できる専門看護師の養成の必要性について述べた。また、今後の課題として、「放射線看護論」から「放射線看護学」への学問領域としての確立、放射線看護教育カリキュラムの構築、放射線看護専門看護師の育成、看護職の職業被ばくの管理があることを明らかにした。特に現在、女性の職業被ばくの線量限度撤廃の議論がされていることを紹介し、看護職がこの議論に関心を持ち、声を上げていく必要があると結んだ。参加者からは、看護基礎教育における放射線看護教育内容の指定規則への取り入れや教育の実際について質問があり、草間氏が自大学の教育内容・方法を具体的に紹介することで、基礎教育にお



る放射線看護教育の理解をさらに深めることができた。

最後に、「日本からの提言、福島第一原子力発電所事故から看護職は何を学び、世界に向けて何をどう発信していくのか？」のテーマで、弘前大学大学院（被ばく医療コース）、長崎大学大学院（放射線看護専門看護師コース）、鹿児島大学大学院（放射線看護専門コース）のそれぞれの修了生の講演とパネルディスカッションが行われた。ひとり目の山内真弓氏（弘前大学医学部附属病院看護部）は「看護職に課せられる放射線災害への備え」と題し、福島第一原子力発電所の事故における自らの豊富な経験から、被ばく医療における看護に携わる集団を管理職、スペシャリスト、セミスペシャリスト、ジェネラリストの4つとし、それぞれの役割において必要な備えについて述べた。ふたり目の吉田浩二氏（福島県立医科大学災害医療総合学習センター）は「原発事故後の看護師の関わりからの放射線看護教育への提言」と題し、事故当時から現在に至るまでの看護職としての関わりの経験から、これまでの放射線看護教育の不足を実感し、体系的かつ実践に即した教育システムの構築を全国規模で行うこと、またその放射線看護教育を担える放射線看護の専門家の育成とその分野における専門看護師の認可を提言した。最後に土橋由美子氏（鹿児島大学病院）は「放射線看護の高度実践教育と福島での学びー放射線看護学実習を終えて、放射線看護の専門性について考えるー」と題し、自らが学んだ教育課程における臨地実習の内容と学びを紹介し、放射線看護専門看護師の役割は、医療者の職業被ばくを最小限にすることや放射線の深い専門知識を活用し対象者のセルフケア自立を支援することであると述べた。講演後、コメンテーターとして登壇した草間朋子氏、Mie Fowler 氏、参加者からの質問や意見をもとにディスカッションが行われた。この中で、チーム医療のキーパーソンである看護職者が放射線防護の知識を持つことで放射線看護の自律性が確保できるのではないかとの提案がなされた。また、講演で述べられた貴重な経験を語り継ぐと同時に、学問に確立に結び付けていくことが放射線看護を目指す者の使命であるとの発言がされた。



○日本看護研究学会第41回学術集会 特別交流集会の報告

日本看護研究学会第41回学術集会特別交流集会5

テーマ：これからの放射線看護と教育の展望

日本看護研究学会第41回学術集会（学術集会長：宮腰由紀子氏・広島大学）において、日本放射線看護学会会員が「放射線看護企画グループ」として特別交流集会を開催しました。

看護職が放射線と関わる機会は医療の場だけではなく、地域や産業分野、ならびに有事の際の被ばく医療へと広がっています。これらを全て包含するのが、「放射線看護」であり、看護における重要な専門領域の一つです。

本交流集会では「放射線看護」の枠組について、太田勝正氏（名古屋大学大学院医学系研究科）からご発表いただきました。太田氏には放射線看護を看護の専門領域とするための要件を現在進めている「看護情報学」に例えてご説明いただきました。要件としては①区別された（異なる）看護実践があること、②その分野に特定された研究が行われていること、③その分野を代表する組織、機構があること、④その分野の教育プログラムが構築されていること、⑤資格認定の制度があることをあげ、④以外は着実に実績を積んでいるが、④については学部レベルの教育プログラム、資格等の認定のしくみができていないことが課題であることを指摘していました。放射線看護の確立と普及のためには看護基礎教育における教育プログラムの構築と指定規則への組み見込み、放射線を恐らない看護職を育成するための研修、高度実践看護師（CNS）の育成、放射線看護研究の促進、日本放射線看護学会の発展が必要であり、日本放射線看護学会への期待が大きいことを再確認しました。

長崎大学、鹿児島大学、弘前大学では放射線看護に関する高度な教育が必要であると認識し、福島第一原子力発電所事故の前から大学院での教育を開始しました。三大学の修了生を代表し、長崎大学大学院修了生である吉田浩二氏（福島県立医科大学災害医療総合学習センター）から福島第一原子力発電所事故の急性期における活動を紹介していただきました。事故直後の混乱した状態で、さらに少ない情報の中で、医師や技師をはじめとした放射線の専門家と看護職の連携活動が必須であり、大学院での教育成果が即座に活用・展開された活動内容でした。個人線量計と空間線量計の測定値から自身が被ばくしていないことを確認しながら活動するなど、エビデンスに基づいた判断をすることが可能でした。まさしく放射線に関する専門的な知識を有する看護職の活動でした。

また、平成27年度から専門看護師を視野に入れた大学院教育（CNS38単位）が三大学で開始されました。野戸結花氏（弘前大学大学院保健学研究科）からは三大学の教育の現状について紹介するとともに、弘前大学の「放射線看護高度看護実践コース」の紹介がありました。放射線看護の考え方として、「被ばく医療における看護支援」と「医用放射線利用に伴う看護支援」を2つの柱とし、対象と活動範囲について報告がありました。このような教育を行っている大学が少ないことから鹿児島大学との単位互換、社会人の就学者のための制度、インターネットを活用した遠隔授業を行っていること、一部の授業ではe-learningを採用し、受講者の都合に合わせて受講が可能であること、さらに最大4年間の履修が可能である長期履修制度を行っていることなどが紹介されました。



最後に浦田秀子氏（長崎大学原爆後障害医療研究所）からは、長崎大学・福島県立医科大学が平成28年度から共同で開設する「災害・被ばく医療科学共同専攻（修士課程）」についての紹介がありました。被ばく医療や災害医療分野の実績をもつ両大学がそれぞれの実績を活かし、各専門家との協働に基づく適切な判断と対応能力をもつ人材の育成をねらいとしています。医科学コースと保健看護学コースの2つがあり、保健看護学コースは「放射線防護及び放射線リスクコミュニケーションの専門知識を基盤に臨床放射線科業務に精通するのみならず、放射線災害発災期から事故収束期、復興期一連の流れの中で、対象に寄り添いながら不安や疑問に対応できる看護師・保健師の育成」を目的としています。

発表後は参加者（約60名）とともに、（1）放射線看護とは（2）放射線看護のために必要な看護教育についての意見交換が行われました。

放射線看護を浸透させる戦略としては、指定規則に「放射線看護」を盛り込むことにより看護基礎教育での教育が可能となること、さらに演習を取り入れ知識を確実なものとすることも重要な戦略であるとの提言がありました。看護基礎教育で教育する場合には、より理解が進むように看護と直結して考えることができるように開講年次等の検討も必要であるとの意見が出されました。

放射線看護の教育は必要であるが、専門性が高いため教育担当者が少ないという現状があることも事実です。そのために大学院レベルで専門的な教育を受けた修了生が、看護実践に止まらず、教育スタッフとしての役割を担うことの必要性と重要性も確認されました。また、海外においても放射線看護は確立されていない現状を考えれば、日本から世界に向けて情報発信していく必要性があり、そのためにはこれまでの活動を継続することの重要性と多くの方々のご支援・ご協力が必要であり、今後の展開が期待されます。

【放射線看護企画グループ】

西沢義子¹、太田勝正²、野戸結花¹、浦田秀子³、新川哲子⁴、吉田浩二⁵、松成裕子⁶、八代利香⁶、井瀧千恵子¹、漆坂真弓¹、北島麻衣子¹、藤井宝恵⁷

1弘前大学大学院保健学研究科 2名古屋大学大学院医学系研究科 3長崎大学原爆後障害医療研究所

4長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 5福島県立医科大学災害医療総合学習センター 6鹿児島大学医学部保健学科

7広島大学大学院医歯薬保健学研究院

【編集後記】

皆様のご協力により、ニュースレター第1号を発刊することができました。

ニュースレターでは、理事会や各種委員会からの報告以外にも、会員の皆様からの声や活動紹介なども掲載して行きたいと考えております。つきましては、次号に「会員からの声」「会員の活動紹介」などの要領を掲載致します。奮っての投稿を期待しております。

その他、ニュースレターの掲載内容や使い勝手など、ご意見がございましたら学会ホームページ《お問い合わせ》http://www.rnsj.jp/web/info_inq.phpまでご連絡をお願いいたします。

広報・渉外委員会（担当理事 太田 勝正、桜井 礼子）

